

# 常設展資料目録

(2016年4月展示資料更新)

## 目 次

第1展示 愛知県下の空襲	2
第2展示 戦争の全体像 15年戦争	9
第3展示 戦時下の暮らし	13

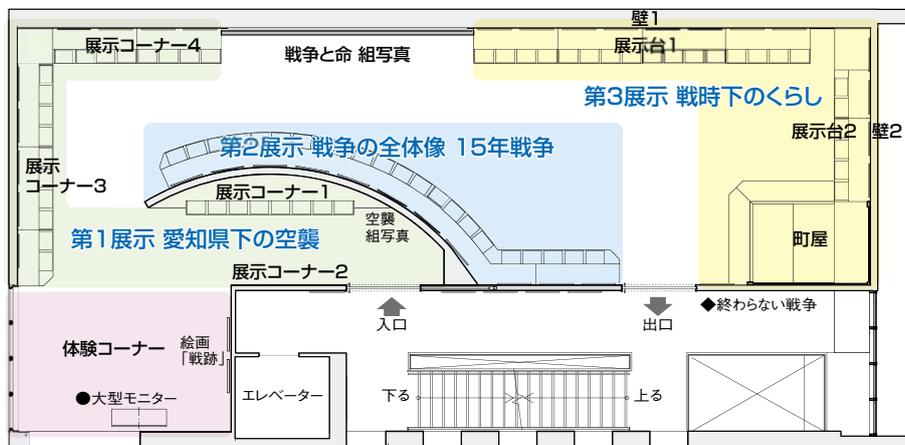
2016年4月の展示リニューアルで、常設展の第1部から第3部までの展示資料が更新されました。この目録にはリニューアル後の展示資料を展示順に掲載しています。

資料名のほかに、リニューアルにおいて資料キャプションが書き改められたので、その文章を掲載しました。また名古屋市焼失区域図のような新規の展示パネルや、資料についてより詳しく解説したパネルが作成されたので、これらの図版も収録しました。

既存の解説パネルは変更されていないのでこの目録に含まれていません。これらは「展示パネル図録」(PDF版、2012年6月改訂版)を参照してください。

## 資料点数

	資 料	資料解説パネル
第1展示 愛知県下の空襲	37	14
第2展示 戦争の全体像 15年戦争	43	0
第3展示 戦時下の暮らし	80	5
合 計	160	19



戦争と平和の資料館 ピースあいち

# 第1展示 愛知県下の空襲

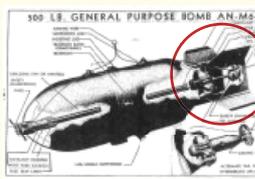
展示順	資料名	id	キャプション・パネル文章
<b>展示コーナー 1</b>			
1	12.7mm機銃弾(薬きょうと弾頭)	登録中	米軍機(グラマン・P51・B29)などに装備された機関銃弾。発射前は金属製のベルトリンクでつながっています。弾頭が発射されると、薬きょうが空から落ちてきました。
2	250kg爆弾の尾部	id5824	
3	250kg爆弾の尾部	パネル	250キロ爆弾図の尾部 250kg爆弾は、主に軍需工場に対する攻撃で使用されました。 長さ120cm、直径36cm、 重さ(火薬装填時)495ポンド(221.4kg) 出典 国会図書館蔵 米国戦略爆撃調査団史料より
4	焼夷弾の炎熱で溶けた防毒面(防毒マスク)	id5403	
5	焼夷弾の高熱で溶けたガラスと金属	ガラス id5728、 金属id5729	焼夷弾空襲による犠牲者は焼死とみなされますが、実際には燃焼によって酸素がなくなることによる窒息死が直接の死因であるという報告もあります。
6	米軍爆撃機B29模型	idナシ	1944(昭和19)年11月24日に初めて日本(目標は東京の中島飛行機製作所)を爆撃したB29「ドントレス・ドッティ」(第73航空団所属)(縮尺1/144)
7	爆撃機B29	パネル	爆撃機B29 大型戦略爆撃機B29は、アメリカが巨費をつぎ込んで開発した対日爆撃専用機です。全長30メートル、幅43メートル、時速576キロメートル、飛行高度能力1万メートル、爆弾搭載量最大9トンです。気密構造であるため、搭乗員(11人編成)はマスクを使わずに1万メートル上空を飛行することができました。航続距離は、爆弾3トン搭載の場合8,150キロメートル、8トン搭載の場合6,070キロメートルで、マリアナ基地と日本本土を往復する15時間の飛行ができました。B29は3,942機がつくられ、延べ1万7,000機が日本に襲撃しました。
8	焼夷弾	id7012	
9	焼夷弾	パネル	焼夷弾 木造家屋の多い日本への爆撃には、延焼効果の高い焼夷弾が使われました。市街地に投下されたのは「油脂焼夷弾」「エレクトロン焼夷弾」「黄燐焼夷弾」の3種でした。最も多く使われたのが展示の「油脂焼夷弾(M69焼夷弾)」です。この焼夷弾19本をベルトで束ね、さらに二段に重ねた計38本を円筒ケースに詰めたものが「E46集束焼夷弾」(長さ約1.5m、直径約38cm、重量約193kg)です。上空約1500mでベルトが外れ、M69焼夷弾が広い範囲に効率よく落下する仕組みになっています。落下した焼夷弾は天井や壁に突き刺さり、次の瞬間、尾部から火のついた油脂をまき散らし、火炎をあげて燃えました。 [図版キャプション] E46集束焼夷弾の構造 頭部(白色) 鉄バンド 尾部(カーキ色) 筒部カバー(銀色) 1発の親弾から38発のM69焼夷弾がバラまかれる。尾部から引きだされた麻製リボン。翼翼の役目をする。バラバラに解き放たれると火がつき、落下するときに火の雨に見える。尾部リボンは折りたたんで収納してある。ナパーム剤 爆薬(着地するとこの爆発によってナパーム剤をまきちらす。) 信管 弾筒部(六角形) 参考「東京大空襲戦災誌」

id区分  
所蔵品(文書) 0000番台  
1000番台  
所蔵品(物) 5000番台  
6000番台  
寄贈品(文書) 2000番台  
寄贈品(物) 7000番台  
8000番台

3

### 250kg爆弾の尾部

250kg爆弾は、主に軍需工場に対する攻撃で使用されました。



長さ120cm、直径36cm、  
重さ(火薬装填時)495ポンド(221.4kg)

出典 国会図書館蔵 米国戦略爆撃調査団史料より

7

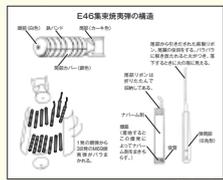
### 爆撃機B29

大型戦略爆撃機B29は、アメリカが巨費をつぎ込んで開発した対日爆撃専用機です。全長30メートル、幅43メートル、時速576キロメートル、飛行高度能力1万メートル、爆弾搭載量最大9トンです。気密構造であるため、搭乗員(11人編成)はマスクを使わずに1万メートル上空を飛行することができました。航続距離は、爆弾3トン搭載の場合8,150キロメートル、8トン搭載の場合6,070キロメートルで、マリアナ基地と日本本土を往復する15時間の飛行ができました。B29は3,942機がつくられ、延べ1万7,000機が日本に襲撃しました。

9

### 焼夷弾

木造家屋の多い日本への爆撃には、延焼効果の高い焼夷弾が使われました。市街地に投下されたのは「油脂焼夷弾」「エレクトロン焼夷弾」「黄燐焼夷弾」の3種でした。最も多く使われたのが展示の「油脂焼夷弾(M69焼夷弾)」です。この焼夷弾19本をベルトで束ね、さらに二段に重ねた計38本を円筒ケースに詰めたものが「E46集束焼夷弾」(長さ約1.5m、直径約38cm、重量約193kg)です。上空約1500mでベルトが外れ、M69焼夷弾が広い範囲に効率よく落下する仕組みになっています。落下した焼夷弾は天井や壁に突き刺さり、次の瞬間、尾部から火のついた油脂をまき散らし、火炎をあげて燃えました。

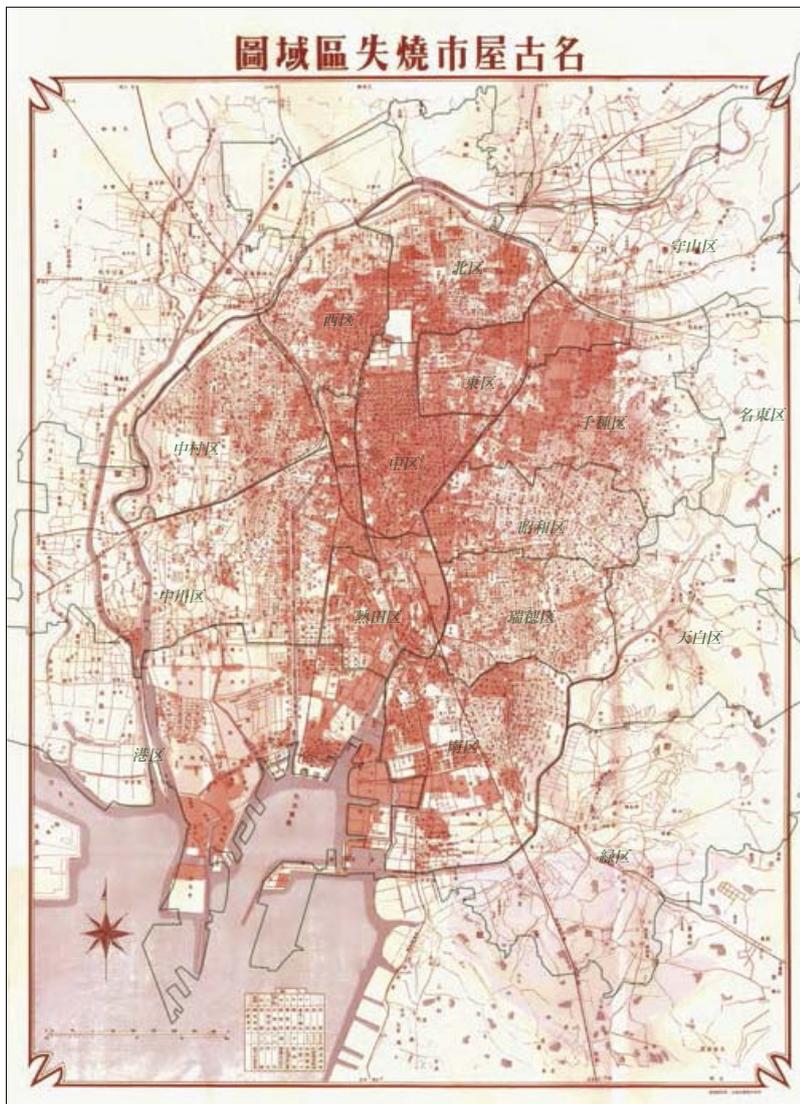


参考 東京大空襲戦災誌

10	E46集束焼夷弾の蓋	id7071	1945（昭和20）年3月12日夜半、寄贈者の家に落下したものを。
11	爆弾の破片	id7076	炸裂の勢いで鋭利な刃物のようになって飛び散りました。
12	焼夷弾の信管	id7510	炸裂させるため弾頭につけた。
13	黒こげになった二銭硬貨と一銭硬貨	id7500	1945（昭和20）年3月19日の名古屋大空襲の時、焼け跡の金庫の中から見つかったものです。
<b>展示コーナー2</b>			
14	名古屋市焼失区域図	パネル	1946（昭和21）年に発行された『名古屋焼失地図』の復刻版（1985年 日地出版）に、現在の名古屋市の各区を重ねたものです。赤色の部分が焼失した場所です。名東区や守山区などが赤色でないのは、空襲による焼失がなかったからではなく、当時、名古屋市ではなかったからです。 〔現在の区域境界線と区名を付け加えた〕 天白区 名東区 緑区 守山区 港区 南区 中川区 熱田区 瑞穂区 昭和区 中区 中村区 西区 北区 東区 千種区

14

## しょうじつ く いきず 名古屋市焼失区域図



1946（昭和21）年に発行された「名古屋焼失地図」の復刻版（1985年 日地出版）に、現在の名古屋市の各区を重ねたものです。赤色の部分が焼失した場所です。名東区や守山区などが赤色でないのは、空襲による焼失がなかったからではなく、当時、名古屋市ではなかったからです。

<p>15</p>	<p>米軍は名古屋のどこを狙ったのか</p>	<p>パネル</p>	<p>■ 2つの爆撃</p> <p>名古屋を目標とした米軍B29の爆撃は、市内にある軍需工場を爆弾で破壊しようとしたものと、市街地を焼夷弾で焼き尽くそうとしたものとに分けることができます。実際には、軍需工場を狙ったにもかかわらず、高性能爆弾が市街地に降り注いだ場合もあります。</p> <p>■ 名古屋市街地への焼夷弾による空襲</p> <p>市街地を目標とした米軍の爆撃は、いくつかの照準点（爆撃中心点）を設定し、照準点を中心に焼夷弾を投下しました。名古屋市街地への空襲のうち、大規模なものは、3月に2回（12・19日）、5月にも2回（14・17日）ありました。それらの照準点をみると、3月の空襲の照準点の外側を囲むような形で5月の空襲の照準点が配置されていることに気づきます。米軍は二段構えで爆撃目標を設定していました。</p> <p>米軍は、東海道線と中央線、および名古屋城の外堀で区切られた区域をゾーンⅠ、そこから東側に向けて広がった区域をゾーンⅡと名付けて区別していました。ハート形をしているゾーンⅠは、文字どおり名古屋の心臓部で、3月の2回の空襲の照準点はここに設定されています。5月の2回の空襲の照準点は主にゾーンⅡです。ゾーンⅠとゾーンⅡの違いは人口の密集度でした。まず3月の空襲で人口密度の高い名古屋の中心部（ゾーンⅠ）を優先的に焼き払い、5月には、それに次ぐ人口密集地域（ゾーンⅡ）を焼き払いました。</p> <p>ゾーンⅠは、かつての名古屋の城下町と重なります。江戸時代から名古屋の人々が暮らしていた地域ですから、このエリアには大規模な軍需工場は存在していません。米軍の司令官カーチス・ルメイは、軍国主義を支える市民の暮らしを攻撃することが、日本を敗北へ追い込む近道だと考えていました。そのために、市民の頭上に容赦なく焼夷弾が降り注ぎ、名古屋の街は焼け野原となりました。</p> <p>〔図中文字〕 米軍の二段構えの目標設定    ゾーンⅠ    ゾーンⅡ    3月12日空襲の照準点    3月19日空襲の照準点    5月14日空襲の照準点    5月17日空襲の照準点</p> <p>〔図版説明〕 米軍は建物の立て込み具合を基準に、密度の最も高い区域を「ゾーンⅠ」、それに次ぐ密度の区域を「ゾーンⅡ」としました。「ゾーンⅠ」は、北を名古屋城の外堀、東を中央線、西を東海道線で区切られた区域で、これは旧城下町とほぼ一致します。米軍は、「ゾーンⅠ」から優先的に焼き払っていきました。作図：西形久司</p>
-----------	------------------------	------------	---

15

## 米軍は名古屋のどこを狙ったのか

**■ 2つの爆撃**

名古屋を目標とした米軍B29の爆撃は、市内にある軍需工場を爆弾で破壊しようとしたものと、市街地を焼夷弾で焼き尽くそうとしたものとに分けることができます。実際には、軍需工場を狙ったにもかかわらず、高性能爆弾が市街地に降り注いだ場合もあります。

**■ 名古屋市街地への焼夷弾による空襲**

市街地を目標とした米軍の爆撃は、いくつかの照準点（爆撃中心点）を設定し、照準点を中心に焼夷弾を投下しました。名古屋市街地への空襲のうち、大規模なものは、3月に2回（12・19日）、5月にも2回（14・17日）ありました。それらの照準点をみると、3月の空襲の照準点の外側を囲むような形で5月の空襲の照準点が配置されていることに気づきます。米軍は二段構えで爆撃目標を設定していました。

米軍は、東海道線と中央線、および

名古屋城の外堀で区切られた区域をゾーンⅠ、そこから東側に向けて広がった区域をゾーンⅡと名付けて区別していました。ハート形をしているゾーンⅠは、文字どおり名古屋の心臓部で、3月の2回の空襲の照準点はここに設定されています。5月の2回の空襲の照準点は主にゾーンⅡです。ゾーンⅠとゾーンⅡの違いは人口の密集度でした。まず3月の空襲で人口密度の高い名古屋の中心部（ゾーンⅠ）を優先的に焼き払い、5月には、それに次ぐ人口密集地域（ゾーンⅡ）を焼き払いました。

ゾーンⅠは、かつての名古屋の城下町と重なります。江戸時代から名古屋の人々が暮らしていた地域ですから、このエリアには大規模な軍需工場は存在していません。米軍の司令官カーチス・ルメイは、軍国主義を支える市民の暮らしを攻撃することが、日本を敗北へ追い込む近道だと考えていました。そのために、市民の頭上に容赦なく焼夷弾が降り注ぎ、名古屋の街は焼け野原となりました。

**米軍の二段構えの目標設定**

● 3月12日空襲の照準点  
● 3月19日空襲の照準点  
● 5月14日空襲の照準点  
● 5月17日空襲の照準点

作図：西形久司

米軍は建物の立て込み具合を基準に、密度の最も高い区域を「ゾーンⅠ」、それに次ぐ密度の区域を「ゾーンⅡ」としました。「ゾーンⅠ」は、北を名古屋城の外堀、東を中央線、西を東海道線で区切られた区域で、これは旧城下町とほぼ一致します。米軍は、「ゾーンⅠ」から優先的に焼き払っていきました。

展示コーナー3 (壁面)			
14	砂弾・防空投砂器	砂弾2点id 5699、5723、 防空投砂器 id5724	焼夷弾による火災は砂をかけても有効だとされました。砂弾は、火中に投じて衝撃で素焼きの容器が割れると、中に詰めた砂が飛び散りました。紙と木でできた防空投砂器は、把手をつけて手榴弾に似せた形状になっています。販売元は名古屋市昭和区の浅井金太郎商店。
15	手榴弾消火器	id6232	焼夷弾による火災に際して、火の中に投げ入れて使います。この赤い箱の中に3個入るようになっていています。GRENADEは英語で手榴弾のこと。
16	竹村式強力消火弾	id5725	本体と紙箱。使用方法として、「直接火中に投じるほか水に混ぜて使う方法もある」と、書かれています。
17	白煙幕	id5413	発煙筒のようなものと推測されます。煙幕は上空の敵機から地上の軍事施設などを隠すために使われました。
18	警戒警報と空襲警報の表示板	id6373	空襲に関する警報は、初めに「警戒警報」、次いで敵機の来襲が確実にになると「空襲警報」が発令されました。表示板は、裏返すと「空襲警報」になっています。役場などの公的な場に掲示されたと思われます。
19	警戒警報と空襲警報	パネル	爆撃機や戦闘機が本土に接近すると、各地の防空監視所から軍司令部に連絡が入り、警報が出されました。敵機来襲の恐れがある時には警戒警報が3分間鳴り、人々は防空頭巾を被って防空壕への退避準備をします。さらに敵機の来襲が迫ると断続的なサイレンの空襲警報が鳴ります。人々は急いで防空壕へ退避しますが、消火作業に備える要員は退避できませんでした。
20	警戒警報と空襲警報DVD操作説明	DVD	[DVD説明] 空襲警報を聞いてみよう。 リモコンを使って「空襲警報」か「警戒警報」を選択して「決定」ボタンを押してください。空襲警報と警戒警報が聞こえます。
21	携帯式サイレン	id5704	矢萩製作所が1941（昭和16）年8月に製造したものの。空襲の警報発令を知らせるために使用されたと思われます。
22	灯火管制用遮光カバー3点	緑色id5301、 黒色（折りたたみ式）2点 id5736	電燈につけて、光を室外に出さないようにする遮光具の一つです。夜間、敵機に目標を与えないよう、明かりを外に漏らさない「灯火管制」は防空の最重要事項であり、国民の義務でした。
23	灯火管制用電球2点	id5313	真下だけに光がくるように電球の側面を青い塗料で塗ってあります。
24	拡声器（メガホン）2点	id5432、 id5434	警報発令をふれ回るために使いました。厚紙製です。
25	腕章2点	id5744	
26	防護分団の回覧板	id7398	1938（昭和13）年～1939年町内会は上意下達の末端機関として、国民を戦争に動員し協力させる役割を担っていました。
27	防空絵とき	id8920	1942（昭和17）年11月 大日本防空協会編輯発行。防空壕の造り方や消火弾による消火方法などを絵入りで解説しています。
28	空襲下の救護法	id1431	
29	衛生法及救急法	id1437	
30	国民防空	id1404	
31	隣保班防空指導要領	id5751	

19

けいかい けいほう くうしゅうけいほう  
**警戒警報と空襲警報**

爆撃機や戦闘機が本土に接近すると、各地の防空監視所から軍司令部に連絡が入り、警報が出されました。敵機来襲の恐れがある時には警戒警報が3分間鳴り、人々は防空頭巾を被って防空壕への退避準備をします。さらに敵機の来襲が迫ると断続的なサイレンの空襲警報が鳴ります。人々は急いで防空壕へ退避しますが、消火作業に備える要員は退避できませんでした。

20

くうしゅうけいほう  
**空襲警報を聞いてみよう。**

リモコンを使って「空襲警報」か「警戒警報」を選択して「決定」ボタンを押してください。空襲警報と警戒警報が聞こえます。

32	『中日新聞』	id2072	昭和20(1945)年1月4日付「42機撃墜破」と書かれていますが、米軍側の記録によれば損失は5機でした(うち1機は帰途に不時着)。
33	敵機本土来襲観測図	id6189	1945(昭和20)年4月25日 朝日新聞社発行 名古屋方面への侵入ルートとして、紀伊半島南方から琵琶湖を経るものと、志摩半島南方から琵琶湖を経るものとを想定していたことがわかります。
34	防毒マスク(防空用防毒面)2点	id5401、 id5412	1937(昭和12)年に施行した「防空法」では、防空において防毒が重視され、各家庭に防毒マスクを備えるよう指導されました。
35	防空法	パネル	「空襲から逃げず消火することは国民の義務」とされ、防空演習が行われました。1941(昭和16)年11月に改正された「防空法」では、「退去禁止(第8条ノ3)」「消火義務(第8条ノ5)」が定められ、懲役や罰金刑も規定されました。空襲から逃げず、焼夷弾による火災の消火にあたるべしという防空法の規定は、空襲による被害をさらに大きくしました。 同年発行の冊子『時局防空必携』では、「焼夷弾は簡単に消せる」とし、「砂袋」や手製の「火叩き」など身近な道具で焼夷弾を消火する方法を紹介しています。しかし実際には、それらで焼夷弾を消すことはできませんでした。
36	消防団用非常袋	id5212	
37	救急用肩掛鞆	id5719	
38	軍事訓練写真	写真パネル	防毒マスクを付けて行進する人々の写真(出典:軍事訓練 1938年南区明治小学校、『愛知百年』中日新聞社、986)
39	防空に就ての心得	id6472	複製パネル
<b>展示コーナー4</b>			
40	ヘルメット	id5276	
41	紙製のヘルメット	id5258	
42	米軍の空襲予告ビラ(伝単)	id7059	
43	米軍の空襲予告ビラ(伝単)	パネル	米軍の「リーフレット心理作戦」でまかれたものです。1945(昭和20)年8月4日午後11時45分から5日午前3時20分ごろまでに、12都市(都城・佐賀・八幡・岩国・八戸・今治・鳥取・高山・浦和・福島・小樽・秋田)に投下されました。ビラは「M26リーフレット爆弾」に入れて投下され、予告された都市のうち佐賀・前橋・西宮・今治は、8月5日午後9時40分から6日午前2時過ぎまでに空襲を受けました。高山には3発ずつ2回にわたり投下されましたが、空襲はありませんでした。その理由として、米軍資料『中小工業都市地域への攻撃』(1945年7月21日付)には、「高山は夜間のレーダー爆撃には向いていない都市」と記されています。 ビラ両面の複製も展示
44	罹災証明書2通、石けん小売予約券1枚	id7077	1945(昭和20)年3月19日の空襲による名古屋市栄区南園町での罹災の証明書です。栄区は、戦局の悪化にともない、行政区を警察管区に合わせるため、1944年2月11日に北区、瑞穂区とともに新設されました(戦災による人口激減のため戦後の1945年11月3日に廃止)。
45	ハガキ3通	id8921	

35

**防空法**

「空襲から逃げず消火することは国民の義務」とされ、防空演習が行われました。1941(昭和16)年11月に改正された「防空法」では、「退去禁止(第8条ノ3)」「消火義務(第8条ノ5)」が定められ、懲役や罰金刑も規定されました。空襲から逃げず、焼夷弾による火災の消火にあたるべしという防空法の規定は、空襲による被害をさらに大きくしました。

同年発行の冊子『時局防空必携』では、「焼夷弾は簡単に消せる」とし、「砂袋」や手製の「火叩き」など身近な道具で焼夷弾を消火する方法を紹介しています。しかし実際には、それらで焼夷弾を消すことはできませんでした。

38



39



43

**米軍の空襲予告ビラ(伝単)**

米軍の「リーフレット心理作戦」でまかれたものです。1945(昭和20)年8月4日午後11時45分から5日午前3時20分ごろまでに、12都市(都城・佐賀・八幡・岩国・八戸・今治・鳥取・高山・浦和・福島・小樽・秋田)に投下されました。ビラは「M26リーフレット爆弾」に入れて投下され、予告された都市のうち佐賀・前橋・西宮・今治は、8月5日午後9時40分から6日午前2時過ぎまでに空襲を受けました。高山には3発ずつ2回にわたり投下されましたが、空襲はありませんでした。その理由として、米軍資料『中小工業都市地域への攻撃』(1945年7月21日付)には、「高山は夜間のレーダー爆撃には向いていない都市」と記されています。

46	堀部智恵子さんの日記と同級生が読んだ弔辞	日記id8922 弔辞id8925	1945（昭和20）年当時、学徒として豊川海軍工廠に動員され亡くなった豊橋高等女学校の生徒・堀部智恵子さんの唯一の遺品である日記と、同年8月30日に神戸小学校で村葬として行われた合同葬儀で、同級生の小川きみゑさんが読んだ弔辞です。写真は前列中央が堀部智恵子さんです。
47	全国に49発投下されていた模擬原爆パンプキン	パネル	米軍は原爆投下を成功させるために、長崎に投下されたファットマンと同型・同重量の模擬原爆パンプキンを1945（昭和20）年7月20日から8月14日までに本州と四国に合計49発投下していました。 地図はテニアン島から出撃した第20航空軍509混成群団（原爆投下部隊）が投下した2発の原爆と49発の模擬原爆パンプキンの投下地を示したものです（出典：『米陸軍航空隊統計概報』原所蔵者「米国立公文書館」）。原爆を投下した広島と長崎には二重の囲みがあります。模擬原爆を投下した場所は一重の囲みとなっています。 愛知県内では「名古屋」（7月26日昭和区八事日赤近くに1発）、「名古屋陸軍造兵廠鳥居松」（8月14日春日井市に4発）、「豊田自動車拳母工場」（8月14日豊田市に3発）に合計8発の模擬原爆が投下されたことを示しています。 〔図中文字〕 豊田自動車拳母工場 名古屋陸軍造兵廠鳥居松 名古屋
48	パンプキン被弾地図	パネル	出典 工藤・金子『原爆投下部隊－第509混成群団と原爆・パンプキン』

47

もぎげんぼく

## 全国に49発投下されていた模擬原爆パンプキン

米軍は原爆投下を成功させるために、長崎に投下されたファットマンと同型・同重量の模擬原爆パンプキンを1945（昭和20）年7月20日から8月14日までに本州と四国に合計49発投下していました。  
地図はテニアン島から出撃した第20航空軍509混成群団（原爆投下部隊）が投下した2発の原爆と49発の模擬原爆パンプキンの投下地を示したものです（出典：『米陸軍航空隊統計概報』原所蔵者「米国立公文書館」）。原爆を投下した広島と長崎には二重の囲みがあります。模擬原爆を投下した場所は一重の囲みとなっています。  
愛知県内では「名古屋」（7月26日昭和区八事日赤近くに1発）、「名古屋陸軍造兵廠鳥居松」（8月14日春日井市に4発）、「豊田自動車拳母工場」（8月14日豊田市に3発）に合計8発の模擬原爆が投下されたことを示しています。

48

ひたん

## パンプキン被弾地図

出典 工藤・金子『原爆投下部隊－第509混成群団と原爆・パンプキン』

体験コーナー			
49	比べてみよう。	パネルと防空頭巾	<p>03-比べてみよう.pdf</p> <p>■比べてみよう。</p> <p>太平洋戦争が始まった年に、主食の米は配給制となりました。戦局が悪化するにつれ、食糧不足が深刻になっていきました。子どもも大人も、いつもお腹を空かせていました。戦争中のこの食糧事情が、子どもたちの成長に大きな影を落とし、「戦争中の子どもの身長は6cm（14歳男子）も低くなった」と報告されています。</p> <p>■調べてみよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●戦争中は、どんなものを食べていたのでしょうか？</li> <li>●子どもたちはどんな暮らしをしていたのでしょうか？</li> </ul> <p>1939年（昭和14年） 1948年（昭和23年）</p> <p>13歳の男子 144.0cm 139.8cm</p> <p>13歳の女子 144.0cm 141.1cm</p> <p>■戦時下の国民学校児童の服装</p> <p>■防空頭巾</p> <p>本土への空襲が始まる1943（昭和18）年ごろから、各家庭で衣類などを再利用して作られました。子どもたちは、登下校や移動の際に携帯し、空襲警報が発令されるとすぐにこれを被って避難しました。爆撃の衝撃で防空壕が崩落した際の土石の落下や、飛んでくる爆弾などの破片を防いだり、水に濡らしてかぶることで焼夷弾などによる火災の熱や火の粉から頭を保護するために使われました。</p> <p>[写真キャプション] 子ども用の防空頭巾（ピースあいち蔵） （試着用の防空頭巾はピースあいちスタッフが作成した複製である。）</p>
50	防空壕の模型		ピースあいちが作成した模型資料
51	防空壕	パネル	<p>防空壕</p> <p>防空壕は、爆風、弾片や落下物からの危害を避けるために造られたもので、原則として「敷地内の空き地に設ける」「家屋の崩壊、火災等の場合、速やかに安全地帯に脱出し得る位置に設けること」とされていました（昭和15年12月 内務省「防空壕構築指導要領」）。</p> <p>横穴式のもの大型で、30人は入ることができました。通勤者用の防空壕も市内の至るところに造られました。警戒警報が鳴ると人々は防空頭巾を被って防空壕に避難しましたが、必ずしも安全な場とは言えませんでした。</p> <p>1941（昭和16）年11月に防空法が改正されると、防空壕は家の床下を掘って設置することが原則とされました。爆弾が投下されたら「そこから迅速に飛び出して防空活動に従事し得ること」が屋内の設置目的となりました。名称も「待避所」に改められ、消火の出動拠点となったのです（昭和17年7月 内務省「防空待避施設指導要領」）。</p>
第1展示	資料	37点	
	パネル	14点	

49

**■ 比べてみよう。**

	1939年 (昭和14年)	⇒	1948年 (昭和23年)
13歳の男子	144.0cm	⇒	139.8cm
13歳の女子	144.0cm	⇒	141.1cm

太平洋戦争が始まった年に、主食の米は配給制となりました。戦局が悪化するにつれ、食糧不足が深刻になっていきました。子どもも大人も、いつもお腹を空かせていました。戦争中のこの食糧事情が、子どもたちの成長に大きな影を落とし、「戦争中の子どもの身長は6cm（14歳男子）も低くなった」と報告されています。

■ 調べてみよう。

- 戦争中は、どんなものを食べていたのでしょうか？
- 子どもたちはどんな暮らしをしていたのでしょうか？

**■ 戦時下の国民学校児童の服装**

**■ 防空頭巾**

本土への空襲が始まる1943（昭和18）年ごろから、各家庭で衣類などを再利用して作られました。子どもたちは、登下校や移動の際に携帯し、空襲警報が発令されるとすぐにこれを被って避難しました。爆撃の衝撃で防空壕が崩落した際の土石の落下や、飛んでくる爆弾などの破片を防いだり、水に濡らしてかぶることで焼夷弾などによる火災の熱や火の粉から頭を保護するために使われました。



51

**ぼう ぐう ぼう**  
**防空壕**

防空壕は、爆風、弾片や落下物からの危害を避けるために造られたもので、原則として「敷地内の空き地に設ける」「家屋の崩壊、火災等の場合、速やかに安全地帯に脱出し得る位置に設けること」とされていました（昭和15年12月 内務省「防空壕構築指導要領」）。

横穴式のもの大型で、30人は入ることができました。通勤者用の防空壕も市内の至るところに造られました。警戒警報が鳴ると人々は防空頭巾を被って防空壕に避難しましたが、必ずしも安全な場とは言えませんでした。

1941（昭和16）年11月に防空法が改正されると、防空壕は家の床下を掘って設置することが原則とされました。爆弾が投下されたら「そこから迅速に飛び出して防空活動に従事し得ること」が屋内の設置目的となりました。名称も「待避所」に改められ、消火の出動拠点となったのです（昭和17年7月 内務省「防空待避施設指導要領」）。

## 第2展示 戦争の全体像 15年戦争

展示順	資料名	id	キャプション・パネル文章
1	アサヒグラフ臨時増刊 満州事変写真全集	id720	[1932 (昭和7) 年2月5日、東京朝日新聞] 1931年9月18日の柳条湖事件から錦州占拠までの日本軍の展開を写真で紹介したグラフ誌です。鉄道爆破の写真も掲載されています。
2	満州中央銀行発行の紙幣と硬貨	id5898-01, 02, 03	百円札の表は孔子と孔子廟、裏は穀物倉庫が描かれています。1932 (昭和7) 年に大日本帝国内閣印刷局が製造しています。硬貨は5が刻まれている5分貨と1が刻まれている1分貨で、1945年2月の発行です。100分が1円です。世界に向けて「満州国」の独立を示す意図で発行されましたが、どの程度流通し、貨幣価値があったのか不明です。
3	満州国全図	id7813	[1938 (昭和13) 年、読売新聞] 新聞の付録として発行されたもので、「満州支那全土明細地図 (全8図)」の内の第8図です。満州が国家として扱われ、国境が表示されています。
4	国際写真情報	id718	[1937 (昭和12) 年11月1日、国際情報社 (東京)] 同年7月7日の盧溝橋事件から日中全面戦争に突入し、12月の南京占領に至る頃のグラフ誌です。各地で戦線を広げた日本軍の戦闘写真集です。
5	国際写真情報	id716	[1938 (昭和13) 年2月1日、国際情報社 (東京)] 前年12月13日の南京占領を記念した画報です。表紙は南京入城式の写真で、馬上で敬礼しているのは松井石根大将です。
6	われらの松井大将	id8581	南京占領の翌年の1938 (昭和13) 年6月に名古屋市牧野尋常高等小学校が作成した副読本です。牧野小学校は松井の出身校で、名古屋駅西方に今もあります。校長による前書きに、「南京攻略の大将であった松井が名古屋に凱旋した際に、牧野小学校の児童たちは揃って名古屋駅に迎え、松井がこれに返礼すると、児童たちは大喜びした」と書いてあります。
7	宣戦布告を伝える1941年12月8日の新聞	id1637	[新愛知夕刊、1941 (昭和16) 年12月9日付、発行日12月8日] 新愛知は現在の中日新聞の前身です。12月8日のアメリカの真珠湾と英領マレー半島への日本の奇襲攻撃を報じています。この真珠湾攻撃で、日中全面戦争からアジア・太平洋戦争に拡大しました。
8	大東亜会議を伝える朝日新聞	id2276	[1943 (昭和18) 年11月8日] 日本はこの戦争で「大東亜共栄圏」の建設を掲げていて、アジア諸国首脳を東京に集めた「大東亜会議」を開催しました。出席したのは、中華民国 (南京) 国民政府の汪兆銘、満州国の張景恵、インドのチャンドラ・ボースなど、日本を含めて7カ国でした (インドはオブザーバー)。11月6日に大東亜共同宣言を採択しました。
9	徴兵身体検査通達書	id6356	日本の軍隊は徴兵制度によってつくられていました。男子は20歳になると徴兵検査を受け、体格や体力に応じて兵士になる義務がありました。この通達書は1943 (昭和18) 年10月20日に、三重県員弁郡西藤原村 (現いなべ市) の村長が発行したものです。11月1日午前8時に津市津中学校 (現三重県津高等学校) の徴兵署に出頭すべしとあります。
10	入営命令書	id7211	兵役につくために兵舎に入ることを入営といい、戦争に行くことを出征といいました。展示品は名古屋市西区上名古屋に住む山田和彦さん宛の入営命令書です。発令日は終戦間近の1945 (昭和20) 年6月16日、入営期日は10日後の6月27日となっています。
11	軍隊生活 入営から除隊まで	id7906	入営から除隊までの軍隊生活の様子を32枚組みのカードで解説したもの。軍隊生活の一コマコマが漫画風の絵とせりふで描かれています。
12	奉公袋 (2点)	id5538, id5733	奉公袋は、戦争中に兵士が戦地に赴く際の必需品を入れたもので、いつ召集されても良いように日頃から備えていました。中には、軍隊手帳や個人の手帳、証書類、戦地から荷物を送るのに使う包み紙や縄などのほかに、勲章や遺言状、「遺髪・遺爪」が入れられることもありました。
13	軍隊手帳	id7404	軍隊手帳は旧日本陸海軍の下士官や兵に交付された手帳で、所属連隊、本人の経歴などのほか軍人勅諭や教育勅語などが書かれていました。
14	引揚証明書	id7475	吉雄賢さんは1947 (昭和22) 年1月4日に海南島から引揚げ、佐世保港に上陸しました。引揚証明書によって当座の現金や、食事券、下着類などが支給されました。
15	受傷 (罹患) 証明書	id7304	この方は陸軍上等兵でした。中国廣西省瀋陽で左足軟部貫通銃創を受傷し、江蘇省鎮江ではマラリアに罹患したことの軍連隊長による証明書です。1944 (昭和19) 年に召集、45年5月に受傷、7月に退院し、8月の終戦を経て46年1月に帰国しました。

16	戦陣訓（冊子）	id7921	戦陣訓は1941（昭和16）年1月8日に陸軍大臣東条英機が示達した訓令です。「皇国」、「尽忠の大義」などの皇国史観や、「悠久の大義に生きる」という生死観を基に、「皇軍」兵士の行動規範を定めたものです。「生きて虜囚の辱を受けず、死して罪禍の汚名を残すこと勿れ。」の部分は降伏して捕虜となることを否定しているため、多くの兵士が捕虜にならずに戦死しました。
17	戦陣訓（レコードと冊子）	id8448	戦陣訓の全文が音声で録音されたレコードと冊子です。レコードは3枚組で録音時間は約20分です。音声は東条英機陸軍大臣自身が読み上げたものです。戦陣訓を普及させるために作製されたものと思われます。ビクターレコードの制作。
18	18歳で硫黄島で戦死した川村恒夫さん（関係資料3点）	1 修養日誌（はがき） id7524 2 本人写真 id7525 3 集合写真 id7526	川村恒夫さんは海軍志願兵で1945（昭和20）年3月の硫黄島の戦いで18歳2か月の若さで戦死しました。集合写真は海軍での教育記念写真で、1944年3月12日のものです。修養日誌は1944年5月15日から7月21日までの日誌です。通信部隊での教育訓練の反省などが書かれており、上官による書き込みや検印があります。7月19日には「今日は入隊満三ヶ月を経たる／サイパン遂に玉砕す／思え、南海を、勇士を」と書かれています。この日誌の後、硫黄島に派遣されたものと思われます。
19	遺書（便せん3枚）、封筒、遺髪（封筒入り）	遺書・封筒 id7372、遺髪 id7387	遺書は岐阜市の小林太一さんが出征にあたり、3人の息子宛てに遺したものです。教育者だった小林さんは「一旦緩急あれば義勇公に奉じ、悠久の大義に生きることを身を以て実践できる機会を与えられる事を無上の光栄と歓喜雀躍して居る」として、毛利元就の3本の矢の故事にたとえて「常に神と共に在りて敬虔感謝天命を知れ」などと訓示しています。1944（昭和19）年6月10日付。遺髪は封がされています。
20	軍事郵便はがき	id7311	北支（中国北部）派遣隊第四二八五部隊國光隊の郡司益良さんから名古屋市千種区の吉原邦夫さんに宛てた軍事郵便はがきです。「だいぶ戦も苛烈となって来た」と、戦闘が激しいことを伝えています。親しい間柄だったのか、「若い我々にとつていよいよやり甲斐がある」「東西離れて居ても嘗ての様に提携して大いにやろう」と書かれています。〔複製〕オモテ面
21	死亡告知書・封筒	id7388	愛知県祖父江町出身の堀田清さんの戦死を伝える死亡告知書です。「昭和十九年八月十九日比島（フィリピン島）北方方面海上ノ戦闘ニ於テ戦死…」とあります。告知人は所属部隊長名、告知の日付は昭和20年4月15日です。封筒の宛先は名古屋市西区西薮下町の堀田かまさんで、宇品局（広島市）から差出されています。
22	軍人に与えられた金鷄勲章	id8079	明治以降、戦争で天皇に尽くした兵士に鶏の勲章（金鷄勲章）を与えました。展示品は功五級金鷄勲章です。
23	神武天皇を神と崇めさせる修身教科書『ヨイコドモ下』	id4-16	〔1941（昭和16）年3月27日発行〕 1941年3月1日、国民学校令が公布され（4月1日実施）、小学校が国民学校となりました。『ヨイコドモ』は、このときに文部省が発行した2年生用の国定修身教科書です。口絵は、神武天皇の弓に金色の鶏がとまり、そのまぶしい光で敵は目がくらんだという神話の場面です。戦いの後、神武天皇は初代天皇に即位し、その日（2月11日）が紀元節（現在の建国記念の日）となりました。〔複製〕ヨイコドモ下表紙
24	紀元節の歌を覚えた3年生『初等科音楽二』	id9-10	〔1942（昭和17）年3月31日発行〕 文部省が発行した国定音楽教科書で、二は3年生用です。紀元節（2月11日）では学校で儀式が行われました。御真影が飾られ、校長が読む教育勅語を聞き、紀元節の歌を斉唱しました。紀元節は修身と儀式、唱歌とセットで子どもの心に染みこんでいきました。〔複製〕初等科音楽二表紙
25	墨塗り、紙貼り教科書『初等科国語二』	id7603	〔1942（昭和17）年7月発行〕 1941年から1945年まで国民学校で使われた国語教科書です。1、2年生用は「ヨミカタ」、3年生以上用は「初等科国語」に分かれていました。戦後、軍国主義的な内容のページなどが墨塗りされたり、白紙やガリ版刷りの新しいプリントが貼られています。〔複製〕表紙 78-79ページ（白紙とプリントが貼られているページ）

26	破りとられた教科書『高等科音楽一』女子用	id9-7	〔1944（昭和19）年4月5日発行〕 高等科は国民学校初等科を卒業した者が進む2年制の教育課程でした。高等科音楽一は現在の中学校1年生用です。男子用と女子用がありました。 20ページの「海ゆかば」、25ページの「女子青年の歌」が墨塗りされ、22ページから24ページまでの「女子青年の歌」の楽譜が破りとられています。 〔複製〕 表紙 本文 20ページ 墨塗りのページ 21ページ 破り取られたページ 22ページ 破り取られたページ 23ページ 破り取られたページ 24ページ 破り取られたページ 25ページ 墨塗りのページ
27	飯盒	id7518	将校用だった角型の飯盒の本体と中蓋です。戦車に押しつぶされたとのことです。
28	図囊かばん	id8431	士官が地図や書類等を入れて腰にさげる小型かばんです。寄贈者の父、酒井利成氏が使用していました。
29	軍服の上着（夏服）、背囊、飯盒、水筒、ゲートル	id8384	所有者の縄田信一さんは1925（大正14）年3月7日生まれ。1945年に20歳で入営し、中国に派兵（鉄道隊所属）されました。展示品は縄田さんが当時身に付けていたものです。 これらはご家族から「伝えたい！戦争の記憶 戦後70年応募資料・作品展」に提供されました。
30	軍靴	id5329	革製で靴底に鉄の鋸が打たれています。
31	日章旗と旭日旗	日章旗 id5550、旭日旗 id5551	日章旗は国旗、旭日旗は軍旗でした。出征のときは、これらの小旗をうち振って兵士を送りました。また、戦勝を祝う行事の際にも使われました。
32	ヘルメット（鉄帽）と認識票	id7240	フィリピン・ルソン島の遺骨収集（1973（昭和48）年）の際に寄贈者が持ち帰ったもの。前部の大きい穴は弾丸の通り抜けた跡とのことです。
33	戦争と文学 1『蟹工船』	id8580	「おい地獄さ行くんだで！」『蟹工船』 「三月十五日を忘るな」『1928年3月15日』 小林多喜二初版復刻版、1929（昭和4）年9月25日（1980年4月、ほるぷ出版刊） 格差貧困が進む今の日本で若者たちの話題になった『蟹工船』です。ここには『1928年3月15日』も集録されています。『蟹工船』の最後には、「この一篇は、『植民地における資本主義侵入史』の一頁である」とあり、多喜二の資本主義への洞察力を感じさせます。 『1928年3月15日』は、3.15事件での特高警察の残虐性を初めて徹底的に暴露した小説です。多喜二はその最後を「三月十五日を忘るな」で締めくくっています。この作品が引き金となり多喜二は虐殺されます。
34	戦争と文学 2『麦と兵隊』	id0987	中国での日本軍を描いた火野葦平『麦と兵隊』 1938（昭和13）年9月19日、改造社刊。 日本軍の野蛮なイメージを一掃し美化するため軍部は、石川に代わる従軍作家として出征中に芥川賞を受賞した火野葦平に白羽の矢を立て、『麦と兵隊』を書かせました。火野は「日本軍が負けているところを書いてはならない。戦争の暗黒面を書いてはならない。女のことを書かせない。敵は憎々しくいやらしく書かねばならなかった」と悩みつつ「徐州会戦に従軍した時の日記」の形でリアリズムを貫きました。
35	戦争と文学 3『中央公論、昭和13年3月号』	id7956	幻の『中央公論、昭和13年3月号』（1938年、中央公論社） 1937年末から38年1月にかけて、芥川賞作家の石川達三は、中国の戦場を見て回り、帰国後すぐ、『中央公論』に『生きてゐる兵隊』を発表し、南京の蛮行（南京事件）を暴き出しました。発禁処分を恐れた編集長は、事前に自主規制の伏せ字で対抗しましたが、即日発禁となりました。この三月号は書店から消えた貴重な一冊です。この執筆で石川達三と中央公論関係者は禁固4ヶ月、執行猶予3年の判決を受けました。

36	戦争と文学 4 『生きている兵隊』	id8578	伏せ字復元の戦後初版本 石川達三『生きている兵隊』 1945（昭和20）年12月20日、河出書房刊 終戦の4ヶ月後、伏せ字なしで発行された完全本です。5万部印刷されました。原稿は没収され消えましたが、石川は初稿のゲラ刷りを密かに隠し続け出版にこぎ着けました。この戦後初版本を読んで国民は南京虐殺の事実を知ることになります。同時に戦時中、発禁処分を覚悟の上で執筆していた石川の作家としての良心も理解しました。
37	戦争と文学 5 『播州平野』	id8579	宮本百合子が描く8月15日 『播州平野』から 1947（昭和22）年4月15日、河出書房刊。 作者を主人公に投影して「戦争とは、人間、美しさとは何か」を描いた作品です。 「大気は八月の真昼の炎暑に燃え、耕地も山も無限の熱気につつまれている。が、村じゅうは、物音一つしなかった。寂として声なし。全身にひろ子はそれを感じた。八月十五日の正午から午後一時まで、日本じゅうが、森閑として声をのんでいる間に、歴史はその巨大な頁を音もなくめくったのであった」とあります。歴史の転換と展望を見事に描き出しました。
38	少年少女義勇団の 腕章とたすき	たすき id7393、腕 章id7394	少年団体は学校教育と一体であるとされ、単位団長には小学校長が就任しました。少年団体は大日本青少年団に統合され、大日本婦人会などとともに大政翼賛の一翼として、国家総動員体制に組み込まれました。戦争を遂行するのは兵士だけではなく、8歳の子どものも国家総動員体制の一員だったので。
39	大日本国防婦人会 のたすきと大日本 婦人会の腕章	たすき id5598、腕 章id7391	大日本婦人会〔同1942年〕は、明治期に結成された愛国婦人会〔結成1901（明治34）年〕と、昭和期の大日本連合婦人会〔同1931（昭和6）年〕や大日本国防婦人会〔結成1932年〕が統合されたもので、翼賛体制の一翼を担いました。
40	終戦の日の中部日 本新聞	id2373	（昭和20年8月15日付） 日本がポツダム宣言を受諾し、アジア・太平洋戦争において降伏することを大見出しで伝えています。 この日、正午に天皇による詔書の朗読が放送され（いわゆる玉音放送）、朝刊は放送終了後の午後に配達されました。
41	原爆瓦	id7078	寄贈者は愛知県飛鳥村村長を務めた佐野鳩さんです（2006年8月15日逝去）。佐野さんは原爆投下後の広島に入った際に、爆心地付近でガラス状に溶けた瓦の破片を見て、爆発の瞬間の莫大な放射エネルギーを感じ取り、原爆の威力を物語る形見として大量の瓦を収集して来ました。瓦は平和への願いをこめて、後世へ語り継ぐ証にと学校や公共施設に寄贈されました。 〔図版〕平成7年6月10日、朝日新聞朝刊より
42	あたらしい憲法の はなし	id8191	〔1947（昭和22）年8月2日、文部省発行〕 「あたらしい憲法のはなし」は、戦後、短期間使用された中学1年生用社会科の教科書です。1947年5月3日に施行された日本国憲法の解説のために、当時の文部省が発行しました。 「憲法」「民主主義とは」などの15章からなり、日本国憲法の精神や中身を易しく解説しています。1950年4月に副読本に格下げされ、1952年4月から発行されなくなりました。 この本は寄贈者の友人が中学生のときに使っていたものです。
43	あたらしい憲法の はなし	id7518	〔1972（昭和47）年11月3日、日本平和委員会発行〕 「あたらしい憲法のはなし」の復刻版です。
第2 展示	資料	43	
	パネル	0	

### 第3展示 戦時下の暮らし

展示順	資料名	id	キャプション・パネル文章
<b>展示台 1</b>			
1	赤紙「臨時（充員）召集令状」（複製）	id7297	現役兵以外の予備役・補充兵などへの兵役召集令状です。赤い紙に印刷されたのでこの名があります。戦争が長期化し、激化して、兵隊不足を補うために乱発され、乙種や退役兵も召集されました。どんな理由があれ、召集を拒否することはできませんでした。
2	白紙「徴用令書」	id8926	在郷軍人に演習召集・教育召集・一時帰宅の兵を集める補欠召集のために出された令書です。白い紙に印刷されていたので、「白紙」と呼ばれました。国民徴用令による工場動員通知令状なども同様です。国土を守る防衛待機召集は「青紙」と呼ばれました。
3	巻紙の遺書	id7196	牧之夫さんが出征前に書かれたものです。之夫さんは1945（昭和20）年5月24日にフィリピンで戦死されました。上部に遺書の内容の一部が掲示されています。
4	罹災証明書	id5751	
5	死亡告知書	id7298	戦死者の家族のもとに送られた死亡告知書です。氏名・日付・戦死の場所などが記入された簡単なもので、紙も更紙というお粗末なものでした。この告知書は金子憲次氏が1944（昭和19）年に、ニューギニアのマンデーにおいて死亡したことが書かれています。
6	千人針	id8017	通常は腹巻の形で、千人の女性から、赤い糸の結び目を縫ってもらったものです。戦場での弾除けになると言われ、「武運長久」を祈って出征兵士に持たせました。この千人針には十銭と五銭硬貨が縫い付けられています。これには「苦戦（九銭）、死線（四銭）を超える」という意味が込められています。
7	慰問袋	id5611	日露戦争から始まったもので、最初は兵士の家族から兵士宛てに、やがて日本国内の学校や家庭から戦地の兵士へ送られました。「武運長久」のお守り、薬品、たばこ、菓子、缶詰等の日用品、激励の手紙などを詰め込んで送った袋です。
8	配給切符いろいろ	衣料切符id7040、配給購入券id6410	物資が不足したため、1938（昭和13）年からガソリンが、1940年からは生活必需品（食料・衣料品等）が統制され、配給制になりました。それらを受け取るための切符です。国民は切符を購入しました。
9	戦時債券	id5877	戦費調達のために政府が発行したものです。展示品は大東亜戦争割引債券です。債券が発行される際、額面よりも安い金額で購入することができる代わりに途中の利息は支払われないというものです。1942、43（昭和17、18）年に発行されたもので、敗戦後は紙くず同然となりました。
10	貯金通帳 2点及び通帳袋 1点	報国貯金通帳id6133、感謝貯金通帳id5751、赤ちゃん貯金通帳通帳袋id5812	多額の戦費が必要になり、国が強制的に国民に貯蓄をさせました。隣組単位で割り当てが行われることもありました。「報国」と宣伝するポスターや「銃後の貯蓄は主婦の手で」と唱えることを推奨する紙芝居（『母さん部隊長』）まで作られました。
11	代用品のナイフ、フォーク、スプーン	id6044	金属資源が戦争に回されると日用品は「代用品時代」になりました。1938（昭和13）年、政府は陶磁器の産地である愛知・岐阜・三重の陶磁器業者に代用品の生産を命じ、業者たちは競って代用品を製造しました。そのため、本来なら鉄や銅製の道具がセトモノ（陶磁器）製になりました。例えば、スプーン、ナイフ、湯たんぽなどです。
12	陶製すずり（墨付き）	id6279	
13	陶製の革靴のかかと	id6022	代用品の一種です。石畳などの舗装された道には不向きで役に立たなかったようです。
14	ガラス製戸車	id6283	
15	紙製の筆箱	id5679	
16	鉛筆	色鉛筆id5682、鉛筆id5683	
17	クレヨン	id5996	

18	紙製ランドセル	id5021	革が不足したために作られました。パルプを薬品などで固めた加工紙で作られているようです。普通の紙より硬く、厚みがあり、柿渋のような色にして革に似せています。
19	アルマイト弁当箱	id5688	
20	氷砂糖の缶	id5776	
21	ドロップの缶	id5776	
22	絵本『ゲンキナコドモ』	id848	
23	学童一日入営召集令状	id7180	学童の一日入営の召集令状で、1941（昭和16）年3月27日付の中部第十三大隊（名古屋城内）への召集令状です。本物の大砲や戦車に乗って説明を受けると、少年兵になる夢は次第に大きくなっていきました。
24	絵本『コドモノエバナシ』	id1063	
25	雑誌『少年倶楽部』	id945	
26	教科書3点	小学算術3年用（昭和12）id7103、カズノホン四（昭和16）id7103、よみかた四（昭和16）id1543	教科書 国民学校となり、知識よりも心身の訓練が強調され、将来お国のために役立つ少国民の育成が教育の目標となりました。この目標に沿って教科書が改訂されました。教科書の内容が軍国主義的となり、国語では「ヒノマルノハタ バンザイバンザイ」などが教材となりました。修身では日本は神である天皇が治める尊い国であるとして、天皇に忠誠を誓うように教え込まれました。
27	通知表3通（昭和13）小三	id7179	1941（昭和16）年、尋常小学校が国民学校と名前を変え、子どもたちは、天皇の命令に従い、国のために尽くすことが一番大切であると教えられるようになりました。この通知表に記された校歌も『碧空高く聳えたつ金鯢の光陽に映えて』から『大君の御楯となりて日本に捧ぐべき身ぞ』と変えられたことがよく分かります。
28	勤労報国隊腕章	id7256	兵器工場へ学徒動員された中学生が使っていた腕章です。厚木中学校（神奈川県）学徒勤労報国隊と日産重工業の名前が入っています。日産重工業は、自動車生産をしていた日産自動車が、自動車生産を縮小して軍用機エンジンの生産を始め、1944（昭和19）年、名称変更したものです。
<b>壁1</b>			
1	遺書（小林寿一）	id8927	小林寿一、昭和19年8月6日記す。
2	いもん文（高一増田さき子）	id2817	
3	かるた	id5778	
4	めんこ、カード	id5815	
5	手紙	id7101	
6	手紙	id7125	軍事郵便 日本国内から戦地の兵士宛てに手紙を送ったり、逆に戦地の兵士が国内に手紙を送る場合の郵便制度で、表には「軍事郵便」「検閲済」という赤いスタンプが押されていました。
7	教育勅語	id5825	1890（明治23）年に発布された「明治天皇のお言葉」で、その内容は国民道徳の根本、教育の基本理念とされました。学校への配布や礼拝、奉読や暗記が行われ、天皇・皇后の写真（御真影）とともに神聖化され、昭和期の軍国主義や天皇制国家の教育を推し進めました。
8	絵3点と習字2点	絵id6311、習字id5816	絵には「大東亜戦争開始第二週年」「12月8日」「軍艦」「七洋制覇」の文字がある。習字は「一億死力で倒せ敵米英」（高一 伊藤よしの）、「村も増産町も増産」（高一 加藤邦利）。
9	慰問袋（児童用）	id5613	内地から戦地の兵隊さんを慰問するために子どもたちに慰問袋を作らせました。受け取った兵隊さんは送り主を知りませんでした。きちんとお礼の手紙を書いたようです。戦地の兵隊さんには嬉しくて楽しみなものであったと言われています。

展示台2			
1	救急カバン	id5004	
2	ゲートル	id5372	
3	鉄かぶと2点	id7087	
4	防毒面	id5409	
5	木銃（訓練銃）	id6271、id6273	戦時中、国民学校では高学年に軍事訓練の時間がありました。生徒に木製の銃を持たせて、訓練に使用しました。
6	三八式歩兵銃（模擬銃、訓練銃）	id6270	日露戦争が終わった1905（明治38）年に日本陸軍の制式歩兵銃となり、アジア太平洋戦争が終わるまで日本軍に使用されました。
7	瓦製こたつ	id7029	
8	水筒	id5422	
9	木製バケツ	id5822	
10	防衛食器（真空容器）	id5458	缶詰の代用品で、食糧を貯蔵できる陶磁器製の器です。この容器は真空パックになる特許製品で、蓋の中央部にある窪みをクギなどで突いて穴を開けると空気が入って蓋が開くしくみになっています。 1943（昭和18）年、大日本防空食糧株式会社が発明し、先ず、名古屋の瀬栄陶器が製品化しました。石炭に恵まれた九州の有田地方などで多く生産されました。
11	陶製アイロン	id5998	熱いお湯を入れて使いました。
12	ガラス製洗濯板	id5475	洗濯板は明治中期にヨーロッパから伝わりました。板に凸凹があり、洗濯物に石けんをつけて凸凹の部分にこすりつけて汚れを落とす道具です。展示品は珍しいガラス製で、洗濯板は戦後洗濯機が普及するまで重宝されました。
13	陶製湯たんぽ	id6004	政府の宣伝に一役買って「国策湯丹保」と名がつけられた陶製湯たんぽです。愛知・三重・岐阜の3県を中心に数多く生産されました。
14	紙製洗面器	id6032	稲わらや麦わらなどを原料とした黄色く硬いボール紙で作られています。この紙は馬の糞の色に似ていたことから馬糞紙とも言われました。この馬糞紙に防水薬を塗って洗面器として使用しました。
15	隣組回覧板	回覧印刷物id6294、板id5815	1940（昭和15）年、全国的に組織された隣組が各家庭の連絡用に作成した回覧文書です。隣組は配給物資の分配、不用品の回収、防空訓練の実施など戦時生活の単位として役割を担い、国民の思想統制にも「貢献」しました。
16	雑誌「他山の石」4種	id8928 id8929 id8930 id8931	桐生悠々が1934（昭和9）年から発行した個人誌。度重なる発行禁止や削除処分にもかかわらず、軍部、権力批判を続け、亡くなるまで筆を折りませんでした。1941年9月発行予定の終刊号も発禁にされました。展示品は1935（昭和10）年8月20日発行、同年9月20日発行（複製）、1940年2月5日発行、同年6月5日発行のものです。
17	「関東防空演習に就て」	id5751	（パンフレット） 1933（昭和8）年7月、愛国婦人会発行。東京を中心に神奈川・千葉・埼玉・茨城の一都四県で行われる防空演習の重要性を説き、10項目の留意事項を解説しています。
18	「日刊言論報国」	id8932	1941（昭和16）年9月12日付日刊誌コピー。 桐生悠々追悼文。友人伊申英治氏が桐生悠々の亡くなる直前の様子を記しています。
19	桐生悠々の評論「関東防空大演習を啜う」の全文。	id8933	1933（昭和8）年8月11日付「信濃毎日新聞」コピー。 関東地方の大規模な防空演習について、「かかる架空的な演習を行っても、実際には、さほど役立たないだろう」とし、東京の上空に敵機を迎えれば、いくら撃ち落としても、「撃ち漏らされた敵機の爆弾投下こそは、木造家屋の多い東京市をして、一挙に、焼土たらしめるだろうからである」と指摘しています。

20	抵抗の新聞人・桐生悠々	パネル	<p>1873～1941年（明治6～昭和16年）                  金沢の生まれ。本名政次。新聞記者、評論家。                  東大法科に入学、卒業後は職を転々とし、1902（明治35）年下野新聞主筆を経て、翌年大阪毎日新聞に入社、記者生活を始めました。信濃毎日新聞主筆時代の1933（昭和8）年論説「関東防空大演習を喰う」を公表、軍部の怒りを買って退社に追い込まれました。以後没するまで個人雑誌「他山の石」を発行し、度重なる弾圧にも屈せず反戦活動を続けました。</p>
21	岩田義道	パネル	<p>岩田義道は1898（明治31）年に現在の一宮市北方町に生まれました。小学校を出てから東京の紙問屋や、郷里の小学校の教員として働いたのち、苦学して、京都帝国大学経済学部に進学しました。河上肇に学び、学生運動に入ります。在学中に京都学連事件に連座して逮捕されたため中退します。働く中で貧しい人々の苦しみに直面し、どうしたら貧しい人を救えるか考えるようになります。1927（昭和2）年に日本共産党に入党します。大弾圧を受けた共産党の再建に尽力するとともに、中国侵略戦争に反対します。1932年10月30日、特別高等警察に逮捕され、その4日後に拷問により死亡しました。地下活動に入れば「二度と会うことはできなくなるだろう」と考えた岩田は、河上肇に金を借り、船頭だった両親に舟を贈ったという逸話が残っています。                  （注）河上肇（1879－1946） マルクス主義経済学者。京都帝国大学講師。著書に『貧乏物語』『経済学大綱』等。                  京都学連事件 1925（大正14）年12月以降の、京都帝国大学・同志社大学などへの左翼学生運動取り締まり、弾圧事件。治安維持法が最初に適用された事件。</p>

壁2

1	風船爆弾	パネル	<p>風船爆弾とは、和紙で作った直径10メートルほどの気球の下に爆弾を付け、高度1万メートルの上空を吹く偏西風に乗せて、アメリカ本土を攻撃した兵器です。                  神奈川県陸軍登戸研究所で開発された秘密兵器で、「ふ号」兵器と呼ばれていました。戦争末期に実用化され、愛知県では1944～45（昭和19～20）年頃、主に鳥居松工廠・鷹来工廠（春日井市）で極秘裏に製造されましたが、椛山女子専門学校付属高等女学校（名古屋市 現椛山女学園高校）でも造られました。同女学校では、1944年秋から1・2年生の3分の1に当たる120人が、水を抜いたプールで、風船爆弾の気球になる和紙をコンニャク糊で貼り合わせる作業などをしました。                  〔図版〕ふ号の全体図                  〔図中文字〕紙製気球本体（直径10メートル） 気球爆破用火薬 本体爆破用導火索 懸ちよう帯 水素ガス排気弁 麻綱19本 高度保持装置 4キロ焼夷弾2個 バラスト砂袋 15キロ爆弾</p>
---	------	-----	---

1

## 風船爆弾

風船爆弾とは、和紙で作った直径10メートルほどの気球の下に爆弾を付け、高度1万メートルの上空を吹く偏西風に乗せて、アメリカ本土を攻撃した兵器です。  
 神奈川県陸軍登戸研究所で開発された秘密兵器で、「ふ号」兵器と呼ばれていました。戦争末期に実用化され、愛知県では1944～45（昭和19～20）年頃、主に鳥居松工廠・鷹来工廠（春日井市）で極秘裏に製造されましたが、椛山女子専門学校付属高等女学校（名古屋市 現椛山女学園高校）でも造られました。同女学校では、1944年秋から1・2年生の3分の1に当たる120人が、水を抜いたプールで、風船爆弾の気球になる和紙をコンニャク糊で貼り合わせる作業などをしました。

ふ号の全体図

林 えいたい所蔵・明治大学平和教育登戸研究所資料館提供

林 えいたい「写真記録 風船爆弾 乙女たちの青春」より

風船爆弾の模型 明治大学平和教育登戸研究所資料館所蔵

2	風船爆弾の実物紙片	id7521	風船部分の裁断紙片です。風船爆弾の気球は、およそ畳一枚くらいの和紙をコンニャク糊で何枚も貼り合わせ、乾燥後苛性ソーダ液を塗って強くし、なめし皮のようになった紙を裁断し、風船の形にしました。出来上がると満球テストに合格しなければなりません。この作業には、特に女学生や女子挺身隊員が動員されました。
3	寄せ書き日章旗	id6046	家族や友人などが兵士の無事を祈って寄せ書きをした国旗（日の丸）です。兵士が出征する時に贈られました。
4	婦人会のたすき	大日本国防婦人会 id5600、 愛国婦人会待鳳分会 id5625、 大日本国防婦人会 id5600	愛国婦人会 1901（明治34）年に設立。出征兵士や傷病兵の慰問、軍人遺族や傷痍軍人の救護などを目的としました。日本が帝国主義への道を進んでいく過程で、国策を支える民間組織として、政府や軍部の援助の下で大きく発展しましたが、上流夫人を中心に身分や秩序を重んじる会であったため、大衆的な婦人組織にはなりません。大日本国防婦人会 1932（昭和7）年設立。戦時下に活躍した大衆的な婦人組織で、出征兵士の送迎や傷痍軍人の遺家族の扶助などを目的としました。白いかっぽう着姿で行動し、「伝統的日本婦人婦徳鼓吹」をスローガンに、多くの大衆婦人の動員と精神強化を図りました。
5	映画ポスター	id6345	
6	標語4点	id5826	戦意高揚や銃後の戒めなどが書かれた短い宣伝文です。町のあちこちに掲げられたもので、当時の社会の特徴や空気がよく判ります。
<b>町屋</b>			
1	ちゃぶ台（丸テーブル）	登録中	家族で食事をする時はちゃぶ台を広げ、寝る時はたたんで同じ場所に布団を敷くという家庭も多くありました。食事をするだけではなく、ちゃぶ台で本を読んだり、遊んだりすることもありました。
2	小机	id7751	三つの引き出しがついた座り机です。
3	百人一首	id7133	1945（昭和20）年3月の名古屋空襲で燃えた蔵の焼け跡から見つかった百人一首と木製の箱です。箱は焦げていますが百人一首は無事でした。
4	愛国百人一首	id7132	戦時中の大政翼賛運動の一つとして、古い和歌の中から愛国心あふれるものを選んで作られたものです。展示品は複製です。
5	「イロハかるた」（複製）	id6102	「イロハ・・・」47文字を頭文字とした言葉札と絵札の二組で出ています。特徴は、非常に小型で、すべてが戦争関係の札であることです。「イフウドウドウニホンゲン」（威風堂々日本軍）から始まり、かるたの最後「を、ん」の代わりに付加された「京」札は「キョウコクニホンイチオクイッシン」（強国日本一億一心）です。
6	柱時計	id7276	ゼンマイ式ボンボン掛け時計です。名古屋市中区池田町（現栄5丁目）の家庭で1935（昭和10）年頃から使用されていました。空襲を免れた貴重な時計です。
7	貼紙2点	勝抜く誓id不明、 大東亜戦争日誌（1941年）12月8日から（1942年）11月14日までid不明	
8	茶筆筒	登録中	この茶筆筒は「ピースあいち」の土地と多額のお金を寄贈してくださった加藤たづさんが生前使用されていたものです。
9	湯のみ	id6027	「トントントンカラリととなり組」で始まる隣組の歌詞が描かれています。常会信条が詳細に書かれた湯のみもあります。
10	真空管ラジオ	id5821	ラジオは戦前から、国民にとって貴重な情報源でした。そこで政府は戦時体制下、ラジオ放送を国民の思想統制に利用しました。「一家に一台 備えようラジオ」といった標語まで作られました。満州事変後、戦況や肉親の安否を気づかう人々はラジオを購入し、飛躍的に台数が増えました。
11	衣紋掛け	id5549	竹製で着物などをつるしておくものです。
12	綿入れチョッキ	id5135	子ども用で模様は兵隊さんです。身の回りのものが戦時色でいっぱいでした。
13	綿入れ着物	id5134	
14	子ども服	id5108	

15	国民服上下	(上) id5063、 (下) id5072	
16	入営の幟	id5382	兵役につくために兵舎に入ることを入営といいます。入営は名誉なこととされ、幟には「祝」と書かれています。送別会の席に飾られたり、竹竿につけて駅までの見送りに使用されたりしました。長さ1メートル80センチ、幅56センチあります。
17	提灯	id5476	左右に日の丸を描いた大きな提灯です。出征する兵士の「武運長久」を祈ったものです。村の神社などで催された「武運長久祈願祭」に奉納されたものか、出征軍人を出した家に贈られたものと思われる。高さ80センチ、幅40センチです。
18	カバー付き電燈	id5309	
19	焼けて穴の開いた天井	id7591	1945（昭和20）年3月11日から12日にかけて、中川区内に焼夷弾が投下されました。そのうちの一発が中村呑海さん宅の屋根に落ち、天井を突き破り炎上し始めたところを家族の者が家に積み上げてあった「消火弾」を投げ続け、ついに消火しました。天井を貫いた焼夷弾は座敷の畳にも穴を開け、天袋や廊下には焼夷弾から飛び散った油の痕跡が黒々と残っていました。 穴の開いた天井は戦後65年間、穴が開いたままにしてありましたが、改築するにあたって、「ピースあいち」に寄贈していただきました。
20	太平洋戦争開戦の放送	パネル DVD解説	1941年12月8日朝7時、「臨時ニュースを申し上げます」と2度にわたるアナウンサーの音がラジオから流れました。「帝国陸海軍は本8日未明、アメリカ、イギリス軍と戦闘状態に入れり」との放送があり、国民は初めて戦争が始まったことを知りました。その時、国民はみな歓喜に沸きました。これまで、中国との長い戦争やアメリカによる経済制裁などで重圧感があったので、「やったぞ!」「万歳、万歳」の声をあげて歓迎したのです。ハワイ沖（真珠湾）においてアメリカ艦隊を撃沈したのを始めとして、上海でのイギリス軍艦への攻撃までを報道しました。ラジオはその日一日中、開戦のニュースを伝えていました。
21	終戦の詔勅（玉音放送）	パネル DVD解説	1945年8月14日の夜9時に、明日（15日）正午に重大放送があるとラジオが流しました。当日15日の正午、「只今より重大な放送があります。全国聴取者の皆様、ご起立をお願いします」というアナウンサーの声の後、「君が代」の演奏が始まりました。その後、国民は初めて天皇の肉声を聞くこととなります。昭和天皇独特の言い回しや難解な用語によって、国民の多くは「終戦」を理解できませんでした。しかし、玉音放送終了後にアナウンサーが解説をしたので、小さな子どもはともかく、中学生ぐらいから上の年代は「敗戦」を知ることができました。戦争に負けたことを知った人の中には、涙にくれる人もいましたが、戦争が終わったことや、もう空襲はないと安堵した人も多くいました。
第3 展示	資料	80	
	パネル	5	